

発表要旨

研究発表1: 文化交流としての宗教活動

《南宋コレクションと仏教世界の再生——士大夫社会の変容——》

塚本麿充 (東洋文化研究所-東京大学)

日本の中国史学では早く「近世」と位置付けられてきた宋代には、士大夫社会が成立し、東アジアはダイナミックな変化を遂げた時期とされている。国土の半分を異民族王朝である金によって支配された宋朝は、1127年に中国の江南に遷移して南宋(～1279)という新たな国家を建設するが、彼らには北方の国土を回復し国家としての正統性を確認するという命題と、豊かな江南の農業地帯を持続的に統治するという、相反する困難な課題を抱えていた。

その南宋社会で大きな力を持ったのが、今まで士大夫社会では疎んじられてきた仏教である。その同じ時期の日本では、南宋からの多くの技術や文物を導入して、奈良・東大寺の復興が行われ、京都や鎌倉には仏教の改革運動が起こり、東アジアは仏教を紐帯とした新たな地域社会が形成されていくこととなる。

この時期の文化交流の具体的な様相を、皇帝と士大夫、そして仏教をキーワードに、中国と日本に伝存する豊富な文物の意味を考えてみたい。

《文化交流としてのキリスト教への改宗》

アルバン・ゴチエ (カーン・ノルマンディ大学)

新たな宗教への改宗過程を、文化移転 (cultural transfers) という解釈枠の中に位置づけ論じた研究が増えている。ますます多くの著作や論文が、宣教者や新たな宗教の側の諸慣行や教義の担い手側だけでなく、宣教の対象となった社会側をも射程に収め、異文化への適応 (accommodation) や同化 (acculturation)、さらには「受容」(inculturation) の諸過程を浮き彫りにしているのである。その一方、発信側社会において宗教の諸側面がどのような変容を遂げたかについては、むしろなおざりにされてきた。だが、文化移転が一方通行で行われることはほとんどない。とするならば、本来の意味での文化「交流」という視座から改宗を研究することもできるのではないだろうか。

この疑問を出発点として、本報告では中世初期ヨーロッパ、より正確には5世紀から12世紀にかけてキリスト教化が段階的に進んだアイルランド、イングランド、そしてスカンディナヴィアといった北部ヨーロッパを考察対象とする。これら諸地域のキリスト教化を文化交流の典型例とみなすこと、言い換えるならば、キリスト教化がカトリックのキリスト教徒の暮らしと自己認識に影響を与えたかを論じるには、どのような手法が適当だろうか？これに関して、1994年に公刊されたJ. ラッセルの著書では、キリスト教の「ゲルマン化」という形容を用いている。また、「ケルト的キリスト教」という概念は非常に人気があり、聖人伝研究をはじめとした中世初期の歴史研究でおおいに議論されている。

(成川岳大訳)

研究発表2: 異文化へのまなざし

《中世日本人の外国人観》

伊川健二(早稲田大学)

中世日本の交渉範囲は、継続的には中国大陸、朝鮮半島、琉球、16世紀半ば以降はイベリア両国、さらには偶発的にはインドネシアも含まれる。とはいえ、必ずしも広大とはいえない。しかしながら、同時期の日本人が訪れ、または訪れることなく、語り、描いた外部地域の範囲は、もう少し広い。たとえば、中国を訪れた僧は、ムスリム商人との筆談を経て、ペルシャ語詩文を入手し、玄奘三蔵の情報が日本へ流入した結果、未知なるシルクロードやインドが具体的に描かれる。その媒体もさまざまで、文学、絵画、旅行記などに大別できる。

本報告では、これらの具体例を概観し、それらの虚実の交錯をひもとき、さらには可能な限りの体系化を試みることで、中世日本人の外国観を総括する。

《窓口としての図書館——ブルゴーニュ公と東方という魅惑——》

ハンノ・ウェイスマン(CNRS-フランス国立文献史研究所)

後期中世の西欧の人々の精神において、東方、オリエント(中東、極東)という概念がいかに重要であったかを強調しておくのは肝要なことである。西欧において、アジアは地理的には非常に遠かったであろうが、アジアという概念は人々の念頭にあった。すなわち、十字軍が遠征したエルサレム、ビザンツ皇帝が1453年まで統治していたコンスタンティノープル、高価な品々(絹、真珠、紙等)をもたらしてくれていた様々な地域、そして世界の果てとみなされていた領域に近い伝説的な土地、である。

15世紀には、ヴァロワ＝ブルゴーニュ諸公は、後期中世のヨーロッパで最も有力な権門の一つへと成長していた。フィリップ善良公(在位：1419-1467年)とシャルル突進公(在位：1467-1477年)の宮廷は、その贅を尽くした壮麗さによって名を馳せていた。すなわち、衣服、タペストリー、祝祭、そして写本も。後期中世の西欧にあるブルゴーニュ宮廷の人々にとって東方が何を意味していたかを知る方法の一つは、その図書館を一見してみることである。この図書館の所蔵内容は、一方では、約900巻を記載する多様で詳細な目録を通して、他方では、このコレクションの現存する約400巻以上によって、研究され得る。事実、テキストだけではなく、多くの現存する写本の諸々のイメージ、そして図書館の目録における、これらや失われた他の写本の記述さえもが、東方への認識に関して我々により多くを教えてくれるのである。

本発表では、15世紀の西欧ではアジアに関して何を知られていると考えられていたか、そして実際には何を知られていたのか、という問題を検証する。

(佐藤龍一郎訳)

研究発表3:
文学にみる文化交流のかたち

《13-14 世紀の写本に見るイタリア＝フランス語——人工言語、混成言語、あるいは接触言語？——》

アンヌ・ロシュブウェ(ヴェルサイユ・サンカンタン・アン・イヴリーヌ大学)

近年、言語学者、文献学者、文学者の手になる多くの中世研究は、文化交流や異文化間の相互作用についての概念を接触の視点から検討している。まず言語地理学に適用されたこの問題提起の方法(接触言語や、混成言語、ピジン、クレオールの相補・類似概念、例えばコイナーやリング・フランカ)は、研究を狭める要因となっていた言語分布による区分、あるいは政治支配による領域区分を超越した言語間や、テキスト、知識、文学形式間の交流に対する関心が向けられることにより、言語科学を超えて広まった。

このような動向が顕著であるのはフランス語圏という術語の用法である。この語の初期の用例が植民地の文脈のなかで一方通行の文化移入を意味していることは、シルヴィ・ルフェーヴル等が喚起している通りである[1]。しかし、ごく最近では、当初の意味からかけ離れて、文学や中世フランス語と関連付けた用例が見られる[2]。こうした傾向はオンライン学術雑誌『インターフェイス』[3]の創刊にも表れており、2015年の第1巻では、ヨーロッパ中世文学史、すなわち、当時の文化どうしの接触の場とみなされうるヨーロッパ中世文学を捉えなおす方法に紙面が割かれている。こうして、さまざまな文化の合流点で生きた作家に関する研究だけでなく、接触の場と呼びうるもの、すなわち言語や知識、そして異なるテキスト文化が出会う空間に関する研究が増加した。たとえば、前者ではチョーサーやマルコ・ポーロ等、後者ではシャルル・ダンジュー統治下のナポリ王宮に加えて[4]、イェルサレムのラテン諸国家やモレア公領を含む東地中海世界も挙げられよう。こうして、イタリア＝フランス語への認識と、イタリアで、もしくはイタリア人の写字生によって複写されたフランス語テキスト群、すなわち「イタリア＝フランス語」資料に対する認識が刷新され、十字軍国家のフランス語や、レヴァント地方で制作された、あるいは流布したテキストの研究への道も切り開かれた。この点については、ラウラ・ミネルヴィーニによる最近の総合的研究を参照されたい[5]。

本発表では、まずイタリアから十字軍国家にいたる文化交流の証左である13世紀の写本数点に記されたイタリア＝フランス語に焦点を当て、幅広い分野のテキストから文化交流を捉える新たな手法の概要を述べることとなる。そして、言語学、古書冊学、文献学、文学の分析に基づいて、上記の新たなアプローチ方法からイタリア＝フランス語の位置付けの変遷を提示したい。

(島崎利夫訳)

[1] シルヴィ・ルフェーヴルは、francophonieの初出例として『フランスとその植民地』(オネジム・ルクリュ著、1887-1889年)を喚起した(《Les acteurs de la traduction : commanditaires et destinataires. Milieux de production et de diffusion》, dans *Translations médiévales. Cinq siècles de traduction en français au Moyen Âge (XI^e-XV^e siècles)*, dir. Claudio Galderisi, Turnhout, 2011, vol. I, p. 168).

[2] 例えば、キングス・カレッジ・ロンドン、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、ケンブリッジ大学の各研究者による2011年から2015年までの共同研究、「フランス以外の中世フランス語圏の文芸文化」(<http://www.medievalfrancophone.ac.uk/>)を参照すること。

[3] *Interfaces : A Journal of Medieval European Literatures* (<http://riviste.unimi.it/interfaces/index>)。「『インターフェイス』はヨーロッパ中世文学の学際的連携の視点を推進し、グローバル文学界における位置と意義を探求する」。

[4] 例えば、Fabio Zinelli, « “je qui li livre escrive de letre en vulgal” : scrivere il francese a Napoli in età angioina », dans *Boccaccio angioino. Verso il Centenario* (Santa Maria Capua Vetere – Napoli, 26–28 ottobre 2011), éd. Giancarlo Alfano, M.-Teresa D’Urso et Alessandra Perriccioli Saggese, Berne, 2012, p. 149–173.

[5] « Le français dans l’Orient latin (13^e–14^e siècles). Éléments pour la caractérisation d’une *scripta* du Levant », *Revue de linguistique romane*, 74 (2010), p. 119–198、および « Les emprunts arabes et grecs dans le lexique français d’Orient (13^e–14^e siècles) », *Revue de linguistique romane*, 76 (2012), p. 99–197.

《英仏の和平を求めて——ジョン・ガワーとフィリップ・ド・メジエールの教訓的書簡——》

小林宜子（東京大学）

ジョン・ガワーの代表作である『恋する者の告解』（1386～1392年頃）は、同時代のフランス文学の影響を色濃く湛えた長篇の英詩である。とりわけギョーム・ド・マシヨールやジャン・フロワサルによる恋愛を主題とした物語詩の影響が顕著であることは、これまでいくつもの論考を通じて明らかにされている。だが、本発表で注目したいのは、ガワーの英詩と同時代のフランスの作家フィリップ・ド・メジエールの著作との間に認められる多くの類似性である。『恋する者の告解』を含めたガワーの後期の作品は、老境に達し、その経験と知識に基づいて若き君主を教え導く助言者としての作者像を提示している点で、フィリップ・ド・メジエールが同時期に執筆した『老いた巡礼者の夢』（1386～1389年）や『リチャード二世宛の書簡』（1395年）と類似している。そのほかにも、社会が直面する様々な危機に関して夢物語という寓意的な形式を通じて己の見解を表明している点、忠実な夫婦愛を平和な社会の礎と見なしている点、アレクサンドロス大王の逸話が圧政と残虐の例話として作品中に織り込まれている点、そして何よりも教会大分裂の解消と英仏間の恒久平和の実現を切実に希求している点で両者の作品は共通している。

本発表では、ガワーの後期の作品の中でも特にヘンリー四世宛の書簡として書かれた『平和を称える詩』（1399～1400年）に焦点を絞り、フィリップ・ド・メジエールの上記二作品と比較することによって、百年戦争を背景にメジエールの主導のもと、英仏海峡を跨いで広がりを見せた国際的な「平和運動」の一環としてガワーの詩を位置づけることを目的としている。ただし、比較を行う際には、異教徒との対立をめぐる両者の見解の重要な相違にも着目したい。

パネル:

西欧中世と日本中世比較研究の可能性

《西欧-日本の交差するまなざし——君主と戦士貴族の印章——》

アンブル・ヴィラン（フランス国立ナント大学）

あらゆる文明、あらゆる時代において、印章を用いることは型押しするという基本的な行為を指す。硬質（金属、骨、牙）の道具を可鍛性の素材（蠟、粘土）に押しつけて作られた印章は、有効な記号を生み出す。経済分野においてこの視覚的な行為がもたらす保証、所有権を証明したり通信の秘密を守ったりする機能、証書の認証における役割、死者をあの世に送る権利は、いずれも図柄の力に対する信用に立脚した人類学的な事柄である。

中世の印章は、図柄の豊富な資料体を形成している。人々はまずもって証書を法的に有効にするために印章を用いたのだが、その際にこうした図柄を作り上げたのだ。中世の人びとは、それを単なる法的効力にとどめず、高度にコード化された図像体系に仕上げたのである。それは、はっきりと階層化された当時の社会を反映して、個人が所属する集団にみずからを位置付けることが出来るものであった。印章の資料体はまた、銘文を伴った図柄のもっとも重要な宝庫である。図柄とテキストを組み合わせた印章の形象 *Imago* は、真の意味において、ある人物の身体的、もしくは精神的な身元を明示し、その所有者の不在時には代理として流通した。その法的用途に加え、中世における印章は、ある人物を身体的、もしくは精神的に所属集団に効果的なやり方で位置づける手段でもあった。印章を一瞥するだけで、中世の人びとは押印者の階層、さらに社会的身分も正確に定義することが出来たのである。メッセージを伝達せしめるがゆえに、印章の図柄の選択は特別な重要性を帯びていた。ただし押印者の多くは、どのような図柄でも自由に選択出来たわけではない。たいていの場合、所属する集団で用いられている図柄を選択させる規範の網にとらわれていたのである。

本報告では、西欧中世における印章を用いる行為についての知識を極東、とりわけ日本におけるものと照合したい。中世末期から近世初頭にかけて、日本ではモノグラム(花押)から印章へと移行し、西欧では印章の法的効力の認証方法が印章(*sceau*)から封印(*cachet*)へと変化する時期にあたるという点で、研究に適した枠組みを提供している。そこで、とりわけ以下の二つの重要な資料体に関心を向けることを提案したい。すなわち、西欧および極東で使用された君主ならびに戦士貴族の印章である。比較の見地において重要なのは、これらが法的用途の問題だけでなく、とりわけエリートたちによる身分の形象化をいかに明らかにしあえるのかを検討することだろう。事実、印章は身分と身元を明確にする場であった。

したがって本報告では、固有名(名乗り)並びに象徴(紋章)システムにかんする体系化の説明の中で、西欧と極東における印章を用いるという行為に類推、もしくは一致がみられることを強調したい。君主や「戦う者」がみずからの身分をいかに形象化したのか、西欧の騎士による印章の使用法とどのような関係があるのかという問いに答えることになるだろう。

(頼順子訳)

《家紋とアルモワリ——比較標章学の一例——》

ロラン・アプロ (フランス国立高等研究実習院)

1904年、アンリ・ド・マジエール＝モレオン子爵が「日本の貴族は9世紀近くの間、紋章を所持してきた」と感嘆して間もなく、1905年にはアルノルド・ヴァン・ジェネップによって「かの国における紋章術は、我が国と同等かそれ以上の発展の極みに達している」と続けられている。多くの碩学や学者たちが認めてきたように、日本中世社会は西欧で *Mon* や *Kamon* の総称で知られている驚くべき標章体系を発展させた。領主階級の中で生じたこの印は、かなり早い段階で組織化され、図形的にも記号的にも一貫した法則に基づいて練り上げられている。それらには武家や公家における、あるいは社会や寺院における権力の行使に結びついた非常に多くの用途があった。武具、軍旗、装束、諸道具、貨幣、その他多くの素材への適用は、家紋を日本中世文化の特徴とみなす要因となっている。

異文化世界におけるこのような発展は一世紀余りにわたって研究されているので、当然のことながら西欧の碩学たちは、日本の家紋の形態や機能と紋章術(*héraldique*)との厳密な比較へと向かった。こちらは彼らになじみ深い、西欧中世で発展した主要な標章体系である。確かに一見、類似性が際立っているように見

えるため、余りに遠く、異なるにもかかわらず双方の文化を自ずと比較解釈させてしまう。歴史、人類学、あるいは標章の普遍的な必要性によって、かかる近似性を説明し得るだろうか？この際立った類似性は、実は見せかけではないのか？結局、西欧独自の解説・分析フィルターを介して全く異なる実態に向けられた視点から生じたものでしかなく、その研究は今なおこの「誤った出発点」によって歪められているのではなかろうか？

本発表では日本と西欧の標章体系にみる類似点と相違を端的に提示し、本主題にかんする研究の現状を報告した後、この比較アプローチが世界の至る所に存在する標章体系を照合するための素晴らしいモデルと貴重な方法を提供し得ることを明示したい。

(田辺めぐみ訳)

《一揆／同盟——中世日本とヨーロッパにおける結合の言語と表象——》

セレーナ・フェレンテ(ロンドン大学キングスカレッジ)

佐藤公美(甲南大学)

中・近世のヨーロッパにおいては、コミュニティ(都市、教会、王国、ギルド、国家、ネイション等)はしばしば身体としてイメージされた。そしてこの比喩的なつながりが、話者や執筆者に様々な政治的論点を議論するための道具を提供したのである。身体メタファーは結合、相互依存、ヒエラルキー、ジェンダー、生物学的な必要、病、完全性、多産さなどの観念を呼び起こし、そのような観念を政治的計画の上に転移させた。私達のプロジェクトは、前近代のヨーロッパと東アジアにおいて、複数性と多様性から一体性への結合が言語とその他のシンボルにおいてどのように表象されるかに焦点を当てるものである。

私達の報告は、1200年から1600年という時期におけるヨーロッパと日本の、俗人の結社や同盟のような水平的な社会的・政治的生成物を考察する。ヨーロッパでは、結社や同盟は特別に創造的な力があり、時には対抗的な社会的・政治的形態となったが、それはリチュアル(誓約、宗教的セレモニー、衣服や旗のような可視的な印)によって、時には身体メタファーに訴えつつ、集団が自身を一つのものとして表象し、政治的正当性を主張することを可能にするものであった。東アジアでは、元代および明初の中国における白蓮教や室町期日本の一般の人々の一揆には、水平的集団を形成する一つの共通要素として仏教があった。私達が報告する事例研究は、比較史的・研究史的枠組みにおいて、中世日本の一揆がどのように自らを表象し、また他者によって表象されたかを分析する。その際、14世紀から16世紀における正当性と結合の言語を分析する。

(佐藤公美訳)

《比較史における宗教と戦争——「長い中世」の日本と西欧——》

フィリップ・ビュック(ウィーン大学)

比較史は歴史叙述における常套句や確からしさといったものを検証することを可能にする。かかる考えに基づき、私は近年、現代以前の複数の社会における宗教と戦争の関係を対比することに従事しているが、その結果、非常に意味深い違いが判明している。私が本シンポジウムで提供する報告はマイケル・アドルフソン(トリニティ・カレッジ、ケンブリッジ)との議論の成果を取り込んでいるが、この議論は日本と西洋における内戦についての共著執筆を視野に入れて行われたものである。その書物の焦点のひとつは300年から1700年までの西欧であり、もう一つは1000年から1600年の日本である。しかしこの二つの時期の比較は形

式論理でいえば釣り合いがとれていないので、それ以外の社会への言及も行う。

キリスト教西欧と仏教日本における戦争正当化の文化は、特に宗教観念の相違によって異なるものとなってくる。日本が相対的に孤立した社会であり、紛争が内部にとどまっていたということも確かに紛争の構造化にとって一つの意味を持っているのだが、ここでは化学者の方法に倣って宗教的要因のみを取り出して分析することにする。本報告の焦点は特に歴史的時間の観念に絞られるだろう（西欧では「救済史」、ドイツ語で *Heilsgeschichte* と呼ばれるものと汚れや罪（さらにその対偶となる禁欲・苦行））。社会的職分、つまり位階集団 (*ordines*) の形象化も問題になる。この最後の要因は確かに物的な関係に属するものだが、宗教的な原則によっても条件付けられている。西欧では王権と司祭職、東南アジアでは転輪聖王と出家した禁欲者(僧)という二項式がそれぞれ存在する。戦争による宗教的功績の獲得(またそれとは逆に、武装・非武装の如何を問わず、暴力に対する超自然的な報い)、唯一神もしくは神々(もしくはその不在や衰弱)のための宗教戦争、そして位階間の部分的な合成形態(テンプル騎士団のような騎士修道会、もしくは延暦寺の僧兵など) —これらのテーマの探求はすべて、西欧と日本の社会や宗教にみる特異性をより良く把握せしめるような諸問題を提起するのである。そして救済史の過程・展開の文脈の中で語られる「戦争」は、これらの主題の多くに関連しているのだ。穢れの概念についてもまた、同様である。

(江川温訳)

《『ローランの歌と平家物語』——比較研究の可能性について——》

ブノワ・グレヴァン(CNRS-パリ中世史研究所)

黒岩卓(東北大学)

日本とヨーロッパ中世の比較研究の可能性のなかでも、ある独特の鉱脈が存在する。比較文化史はアプローチ(歴史・社会学・文学・文献学)のみならず場所(ヨーロッパ・極東)そしてとくに時代(20世紀初頭・第二次大戦後・21世紀初頭)に従って発展する。

今回は、当時(少なくとも日本において)日仏の中世を比較する上での代表例となったある業績を分析・再読しつつ、歴史比較の概念の発展それ自体、比較文学の概念それ自体を検討してみたい。佐藤輝夫による記念碑的業績である『ローランの歌と平家物語』は1973年に出版された。この大部の著作の前半は『ローランの歌』の文献学的側面に充てられており、西欧武勲詩の見本たるこの作品に関する文献学的研究の進展によって必然的に古くなってしまっている。後半では『ローランの歌』と『平家物語』の文学的・人類学的な比較が試みられており、そこからいくつもの問題が提起されている。この比較はどんな伝統に位置づけられるのか? どのような先行例があるのか? 文学的な比較の技法は文化史でも有効か? ほぼ半世紀が経った今日、この試みをどのように再読できるのか? より一般的にいて、古代末から中世の日本のテキスト(とくに文学的テキスト)とヨーロッパ中世のテキストを比較するのは妥当なことなのか、もし妥当だとするならそうした比較は何らかの未だ存在しない基盤に拠るべきなのか?

これらの質問を投げかけつつ佐藤輝夫の仕事进行分析し、その部分的なフランス語訳の試みを紹介したい。

(黒岩卓訳)

研究発表4: 比較研究のさきに

《マンドレイクの採取法——中世ヨーロッパ・中東・中国における知識の往還——》

山中由里子(国立民族学博物館)

中世において、《驚異》は自然の秩序の一環をなすと信じられ、人間や物質界に関する博物学的知識の重要な構成要素であった。ヨーロッパの *mirabilia*(驚異)は、特に『中世の夢』などを著したジャック・ル・ゴフ、近年では『驚異と自然の秩序 1150-1750』の共著者ロレーヌ・ダストンとキャサリン・パークによって、既に体系的な研究がなされてきた。しかしながら比較文学比較文化の観点からは未だほとんど検証されていない。中東には、同じく「驚くべきこと」を意味し、「不思議に思う」、「驚く」を示すアラビア語の *'ajiba* を語源とする *'ajā'ib* というジャンルがある。*Mirabilia* と *'ajā'ib* は、《驚異》という同一の概念に基づいているだけでなく、例えば『アレクサンドロス大王物語』、あるいは博物学に関する古代の著作などの共通する典拠から知識を得ており、同じようなモチーフ(犬頭人、アマゾン、生命の水など)や、信ぴょう性を担保する語りの形式をも共有している。情報を収集し、まとめ、図像で視覚化するという編纂の行為もまた、両者に共通している。およそ11世紀から14世紀という、《驚異》が蔓延した時代的枠組みまでも一致しているように思われる。

中世の一神教世界の驚異に関するこの現在進行中の比較研究のケーススタディとして、本発表ではラテン語、アラビア語、ペルシア語、中国語の百科事典や医学書に見られる不思議な植物、マンドレイク(マンドラゴール)に関するテキストと図像に焦点を当てる。かかる考察をとおして、《東洋》と《西洋》の境界を越え、複数の宗教・言語・文化が絡み合うユーラシア大陸の複雑な思想史の一端を解明する。

《中世東洋における教訓物語——ThEMA(中世教訓偽集シソーラス)データベースにおける索引化のための批判的要素——》

ジャック・ベルリオーズ(CNRS-社会科学高等研究院)

東洋、とりわけ日本において、教訓的な逸話集成《説話》は仏教の枠組みのなかで発展した。これら短い物語はまた、真実であろうとし、史実を拠りどころとしていた。これらの物語は社会とその時代の日常生活についての重要な情報源である。最初の説話集は8世紀に現れるが(『日本霊異記』)、説話集が盛んになる時代は、西洋のように12-13世紀である。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』、『古今著聞集』あるいは『沙石集』などは、公の場で民衆に向かって僧侶が読みあげてを想定していた。

別の例もある。『三蔵』(サンスクリット語: Tripitaka ; パーリ語 : Tipitaka) すなわち『三つの籠』は、仏教諸派の集まりである上座部仏教(theravāda)が依拠した仏典の一大集成で、教化や布教を目的とした非常に多くの物語が含まれている。これらの物語は民間仏教を把握させ、インド、中国、ジャワ、ビルマで宗教建築を彩る図像を理解せしめるものであり、エドゥアール・シャヴァンヌは「比較文学と民俗学にとって非常に興味深いものである。…仏教は、この世に存在したはずの物語の、最も巨大な集積所のような」と記している。

私は、フランソワーズ・デュエムの協力と、ピエール＝シルヴァン・フィオザ、フランシスカス・ヴェルランといったインド学・中国学の専門家たちと共に、『漢訳三蔵』に含まれている物語の索引化を2016年に終えた。エドゥアール・シャヴァンヌによるフランス語部分訳『漢訳三蔵抜粋500の物語と教訓話』(*Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois*, 全3巻4部冊、パリ、1910-1934年)に拠ったが、ここでフラン

ス語に訳出されている物語は、サンスクリット語の原典をほぼ失い、3～5 世紀のそれぞれ異なる時期に漢訳されたものである。ベルナール・フランクとドミニク・ラヴィーニュ＝クリハラによってそれぞれ 1968 年と 2002 年にパリとアルルで刊行された『今昔物語集』の部分的なフランス語訳の索引化も、2017 年 7 月に終えている。以上の物語は、データベース ThEMA(中世教訓逸話集シソーラス:パリ歴史研究センター研究プロジェクト「長い中世の歴史人類学」)で、要約やキーワードから調べることが出来る。現在は、2014 年にパリで刊行されたジャクリーヌ・ピジョのフランス語訳に基づき、フランソワーズ・デュエムと共に『発心集』の索引化をすすめている。重要なのは、西洋の研究者にはあまり知られていない作品への容易なアクセスを可能にすることなのだ。

そこで私は、東洋の教訓文学の概要のほか、とりわけ中世の中国や日本についてあまりよく知らない読者向けの索引化のために踏み込んだ手順を提示したい。つまり、いかにして東洋の思想、宗教、現実についての特性を説明するのか？ 専門用語の対応表や、用語解説などがその例である。また、どのような他の作品を索引化していくべきだろうか？ 『本生譚』(ジャータカ)だろうか？ さらに結論として、戒めとなる語りや、教訓物語を聞く者と読む者への効果をめぐる西洋と東洋の比較アプローチによって研究の土台を示し得るはずだ。はたして「信仰を説くこと faire croire」という一般的な枠組みの中で、教訓物語に託された信仰のかたちを押し量ることができるのだろうか？

(室崎知也訳)

《日欧の中世軍事文化の比較史》

堀越宏一(早稲田大学)

中央アジア起源の技術である乗馬術が導入された結果、日本では 5 世紀に、西欧では 8 世紀に、騎兵が生み出された。それと同時に、これら二つの文明は、馬上から矢を射る軍事技術も取り入れたのだった。けれども、この騎射については、日本は 14 世紀までこれを主たる戦闘法として用い続けたのに対して、ヨーロッパでは 12 世紀以後、その強力な殺傷力にもかかわらず、貴族であり、戦士階級の中心である騎士はこれを放棄し、槍と剣による突撃を主戦法として選ぶようになった。これらの事実の軍事的ならびに社会的背景の考察を通じて、西欧中世において弓射が有していた特殊な意味合いを明らかにすることができるだろう。